

学校緑化経営による学校植栽の研究-地球環境時代の学校植栽モデルの構築-

著者	長島 康雄
号	15
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	教博第161号
URL	http://hdl.handle.net/10097/60350

なが しま やす お

学位の種類 博士（教育学）

学 記 番 号 教博 第 161 号

学位授与年月日 平成 27 年 3 月 25 日

学位授与の要件 学位規則第4条1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期3年の課程）
総合教育科学専攻

学位論文題目 学校緑化経営による学校植栽の研究
ー地球環境時代の学校植栽モデルの構築ー

論文審査委員 (主査)

教 授 小 泉 祥 一

教授 工藤 与志文

教 授 有 本 昌 弘

教 授 喜 多 明 人

(早稻田大学)

＜論文内容の要旨＞

本論文は、学校緑化経営の視点から学校植栽をとらえ直し、地球環境時代にふさわしい学校植栽「里山 SATOYAMA モデル」を構築し、その教育的意義を明らかにすることを目的としている。

第1章では、学校施設設備がどのように位置づけられてきたかを明らかにした。学校施設設備として学校植栽を学校環境論の視点によりとらえ直し、これまで学校施設設備として十分な位置を与えられてきたとは言えないことと学校植栽が生きた教材としての特性をもつことを明らかにした。

第2章では、学校施設基準行政の中の学校植栽を見直すことにより、学校植栽がどのように扱われてきたかを明らかにした。これまでの学校施設設備整備指針を分析し、その中にみ

られる学校植栽の位置づけの特徴を明らかにした。また近年の文部科学省の各種資料集を分析し、生物多様性への一定の配慮を確認した。また、学校施設整備指針の中にも、地球環境時代を意識した記述があることを認められるが、生態学や緑化学の分野で問題視されている「郷土種」や、多義的な「ビオトープ」という概念が使われているという問題点を指摘した。

第3章では、地球環境時代に求められる学校植栽のあり方を検討するために、生物多様性に関わる条約や国内法規が学校植栽に与える影響を検討した。批准された生物多様性条約と生物多様性基本法、生物多様性国家戦略の条文と記述を取り上げ、それらが学校教育にどのような影響を及ぼすのかを明らかにした。学校植栽において解決すべき課題として、外来種が導入されている点にあることを指摘した。

第4章では、日本の自然の特性をふまえた具体的な学校植栽のあり方を明らかにするために、日本の豊かな自然環境について検討した。さらに自然と人間の良好な関係を示す概念「里山 SATOYAMA」を取り上げ、その概念を学校植栽モデルに取り入れることが有効であるという根拠を示した。豊かな自然と共存してきた日本の優れた伝統文化である里山 SATOYAMA が、過度な画一性をもたらす一因となっている学校ビオトープに代わる概念として大きな可能性があることを示した。

それを受けて第5章では、学校緑化経営による学校植栽モデル 15 類型を構築した。生態系の多様性については日本の植生帯に着目し、種の多様性ならびに遺伝子の多様性については環境省「生物多様性保全のための国土区分(試案)及び区域ごとの重要地域情報(試案)」についてに着目し、学校植栽 15 類型モデルを構築した。この2つの知見を地図上に重ね合わせて、生物多様性をふまえた学校植栽モデルの構築のための新たな地域区分を行い、日本の学校植栽全体を視野に入れた類型モデルを提示した。

第6章では、学校植栽モデル 15 類型を用い、4校の実践事例を分析し、そのモデルの有用性を検証した。その結果、自然環境を再現することに主眼の置かれたビオトープと異なり、学校植栽モデル 15 類型(里山 SATOYAMA モデル)は、長年にわたる林業的活動と農業的活動をとおして形成された歴史的・文化的景観であり、成立過程そのものに「循環型社会の実現」への志向が強く包含されていることを指摘した。その意味において、地球環境時代の学校植栽モデル(15 類型里山 SATOYAMA モデル)は有効であることを確認した。

学校緑化経営による学校植栽モデル 15 類型のもつ教育的意義については、教育課程に関する内容と、教育課程の基礎に関する内容の2つ分けて整理した。

教育課程に関する内容は、教科教育、あるいは教科外活動における教材の提供による教育的機能・効果である。とりわけ、生活科や理科で、教科学習に直結した形で身近な自然を素材にした学習活動が展開できることを指摘した。季節の変化や植物の生長などに関して効果的な教材となることを指摘した。

教育課程の基礎については、自然体験の場、原風景を形成する場、子どもの権利を学ぶ場の3つの機能が重要であることを指摘した。

1つ目は、自然体験の場としての機能である。貴重な自然に触れることとともに、身近な場所に自然があり、その自然に日常的に触れること、能動的に自然に関わっていくことの重要性を明らかにした。2つ目は、原風景を作り出す機能である。原風景は、日本人のアイデ

ンティティの形成にも大きく寄与していることから、日本の豊かな自然を反映した学校植栽により日本人としてのアイデンティティの形成、そのための郷土観の育成において、地域由来の自生種の植栽されている校庭の教育的役割が大きいことを指摘した。3つ目は、子どもの権利を学ぶ場としての学校植栽になりうる点である。学校環境論においては、学校の主役である子どもが、学校環境そのものに働きかけることの意義が重要であるとされており、子ども自らが主体的に近く神社から地域由来樹種の種苗の採取を行い、数年後に学校施設設備としての学校植栽の成立という子ども参加による社会価値形成の可能性があることである。

以上、学校緑化経営の視点から学校植栽をとらえ直すとともに、地球環境時代にふさわしい学校植栽モデル 15 類型を構築し、その教育的意義を明らかにした。

〈 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 〉

従来、学校植栽に関する研究では、子どもの教材、学校施設設備として重要な教育的意味を持つにもかかわらず、十分議論されてはこなかった。それは、学校植栽が教育的な発想よりも、修景的な意味での土木工学的な発想や経済的合理性が優先されてきたからであると考えられる。このような問題意識に基づき、本論文は教育経営学の視点から学校植栽を見直し、生物多様性条約とその国内法の動向、生態学や緑化学の研究成果をふまえて学校植栽モデルを構築した。

そのために、学校環境論の視点から学校施設設備を見直すとともに、学校施設整備指針を検討し、学校施設における画一性や教育予算の脆弱性の問題点を指摘した。また、生物多様性条約と生物多様性に関わる国内法規を分析するとともに、日本における伝統的な「里山」の教育的な価値を明らかにし、生物多様性、すなわち生態系の多様性、種の多様性、遺伝子の多様性をふまえた学校植栽を実現するための視点として学校緑化経営という概念・枠組みを提示した。この概念は、学校緑化を各学校の教育活動を支える教育環境の要素としてとらえ、学校緑化を実現するための計画、実施、評価のために必要な人的・物的・財的・教育技術的および組織運営的諸条件の整備活動の総体のことである。すなわち、教育課程経営の観点から学校緑化を見直すということである。この学校緑化経営の視点から学校植栽の類型モデルを構築した。そして、学校ビオトープにみられる持続可能な社会・循環型社会の実現への志向の欠落の問題点を指摘し、学校ビオトープから学校緑化経営による学校植栽モデル（里山 SATOYAMA モデル）への転換の必要性を指摘した。さらに、4校の実践事例を分析することにより、学校植栽モデルの有用性を検証した。事例校を選定する場合、生態系の多様性を示す植生帯に注目し、緯度による影響と標高による影響を配慮して選定している。

また、この学校植栽モデルの教育的意義については、①教育課程に関する側面、すなわち教科教育と教科外活動における教材の提供と、②教育課程の基礎に関する側面、すなわち自然体験の場、原風景、子どもの権利を学ぶ場としての機能に整理している。

以上のことから、これまで学校施設設備論として十分に展開されてこなかった学校植栽に対して、教育経営学の視点から見直し、生物多様性、および生態学や緑化学の研究成果をふまえ、学校緑化経営という新たな概念を設定し、それをもとに、学校植栽モデルを構築したことは、学校植栽研究を大きく前進させ、教育経営学に大いに貢献するものであり、研究上の意義が認められる。また、この学校植栽モデルは、環境省の生物多様性保全のための国土区分(試案)を取り入れ、類型モデルとして構築されており、全国の学校において活用することができるものとなっている。これは学校教育に大きく貢献するものであり、教育実践上の意義も認められる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。